

孫はパリジエンヌーその⑤

# テロムサシムらんのぼの実る頃

## IS同時多発テロ

2015年11月パリ・モンマルトルの北でIS同時多発テロが発生した(※1)。

事件の7ヶ月後、爺々と婆々は、ソラの「ママ」の演奏会の助演でパリに出張。1日、時間が空いたので、モンマルトルを観光した。最寄りの地下鉄駅から土産物店が続く通りを山頂のカトリック寺院に向かう。観光客はさほど多くはない。

と、その時、軍用車両が停車し中から自動小銃を手にした4人の兵士が降りてきた。防弾ベストにPOLICEの文字。見回



騎馬警官(国家憲兵隊)に驚く婆々。

すと、そこかしこに武装警察がいる。少し歩くと武装騎馬警察が。その先にはエンジン音を轟かせたトレールバイクに乗った武装警察が階段をバイクで降り降りする。何かあつたのかと土産物店で聞く

とテロの警備だと言ふ。さらに寺院に向け歩む。アフリカや中東からの移民と思われる人々が道に布を敷き露店を構える。商材はエッフェル塔の置物、怪しげな宝石や指輪、フランス観光地のカード

そして絵葉書等々だ。アフリカ系の店主がにこやかに話しかける。爺々と婆々がフランス語を解さないと見ると英語で「このエッフェル塔は現地で買うより安いよ。色も高貴な金色だよ」と勧める。初めてのパリだ。リュックは胸に抱えるようにと「ママ」から厳に言われている。

快晴だが次第に風が強まる。婆々は首に巻いた長めのスカーフを「真知子巻」にかぶる。すると親しく話をした店主が店じまいを始める。別の露店

パリ人の週末の保養地でもあるフォンテーヌ・ブロー・コミューンで、ママたちとフランスの古楽合奏集団の共演。フランスは市町村の区別はなく全て「コミューン」と呼ぶ。

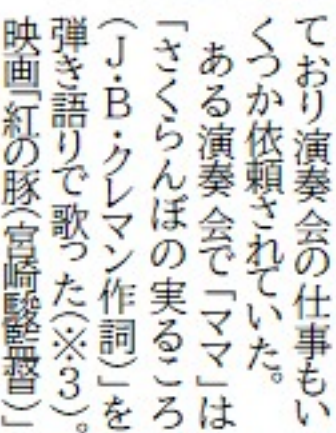


も、その向こうの露店も、後ろを振り返ると、少なくとも露店が店じまいを始める。山頂のカトリック寺院を見学。帰り道に露天で土産を、と考

えていた爺々と婆々だが、帰り道には「店」が見えない。彼らは婆々の「真知子巻」をイスラム女性が被るヒジャブ、抱えたリュックには爆弾、そして爺々は実行犯の見張り役と誤解し、警戒して撤退したのかも知れない。なお、フランスには公共の場で顔を隠すことを禁止する法律(※2)が有ること

を爺々と婆々は後で知ることになる。  
**さくらんぼの実るころ**  
「ママ」がパリにやってきたのはISテロの3ヶ月後。爺々と婆々の渡仏の4ヶ月前だ。2015年10月、大阪国際音楽コン

クール民族音楽部門で3位(日本人一位)を獲得した「ママ」はワーキングホリデービザでフランスに行くことがすでに決まってお



ており演奏会の仕事もいくつか依頼されていた。ある演奏会で「ママ」は「さくらんぼの実るころ(J・B・クレマン作詞)」を弾き語りで歌った(※3)。

映画「紅の豚(宮崎駿監督)」でマダム・シーナ役の加藤登紀子が「さくらんぼ…」を歌うシーンを覚えていた人も多いただろう。シーナは戦争へのアンチテーゼとしてパリコミューン革命(※4)を比喩的に歌っているのだがママは「さくらんぼ…」の本来の意味を理解せず、単なる恋愛のシャンソンとして筆の弾き語り

で歌ってしまった。しかも、大勢のフランス市民が亡くなったISテロの3ヶ月後というタイミングの悪さ。加えてフランス語もままならない渡仏直後にだ。メルボルンとロスへの留学で身につ

※1 2015年11月13日、フォンテーヌ・オ・ロワ通りを含むパリ18区を中心にISテロが発生。バタクラン劇場でテロ武装集団とパリ警察の特殊部隊との銃撃戦となり、89人が死亡し多くが負傷した。パリ・コミューン革命の決戦場と重なる場所だ。  
※2 フランスでは2004年に制定された公立学校におけるヒジャブ(スカーフ)禁止の法律に続き、2011年4月11日、公共の場で顔を覆うものを着用することを禁止する法律が施行された。コロナ禍でもフランス人がマスクをしたがらないのは、この法律の影響もあるのではないかと筆者は考える。  
詳しくは、<https://www.hurights.or.jp/archive/s/newsletter/section3/2016/05/post-316.html>  
※3 「さくらんぼ…」の歌詞はパリ・コミューン革命で最後まで抵抗した闘士、J・B・クレマンと看護師ルイズとの恋愛物語。単なる3番までの恋愛歌だったが後の歌集に「看護師ルイズに捧げる」とのクレマンの一文でパリ・コミューン革命の鎮魂歌へと一変した。  
※4 150年前に起こったパリ・コミューン革命はパリ史の中で最も重要な出来事の一つ。世界初の労働者が樹立されたものの72日間で崩壊。最後の週は「血の一週間」と呼ばれる。ベルイユ政府軍とプロイセン軍は虐殺的に武力行使しコミューン軍を粉砕した。

けた英語で対応はしたものの思想的、哲学的な意見や質問もあり回答にはかなり苦勞したという。フランス人にとつて自由、平等、友愛とは生活の指針となる原則だ。そして、この歌は単なるシャンソンではなく、社会的不正と、抑圧され征服された労働者の解放について語らなければならぬ。そして、社会正義を信じ、高い志を持ち3万人以上が虐殺されたパリ・コミューン革命で勇敢に戦った同志を決して忘れてはならないとの思いのこもった歌だったのだ。  
**コロナ救援給付金**  
最後に爺々と婆々が気

にもなるのが「ママ」の収入だ。「ママ」は日本の音楽を普及するために渡仏した。「芸術家ビザ」を持つ演奏家とはいえ異国で暮らす異邦人だ。「さくらんぼ…」の一件で異国の文化を積極的に理解する必要性を痛感したと「ママ」は言う。そんな、異邦人に対しても演奏家組合と政府との間で決められた芸術家への最低賃金(1日・一人200ユーロ(約3万円)は組合員でない「ママ」にも演奏の対価として支払われる。さらに、コロナ禍では真つ先に救援給付金が「異邦人」を含め芸術家に振り込まれたのもフランスらしい。(了)